

短歌

俳句

馬場あき子・黒田杏子【監修】

同時入門



短歌 俳句

馬場あき子・黒田杏子「監修」

同時入門



東洋經濟新報社

監修者紹介

馬場あき子（ばば・あきこ）

歌人。昭和3年、東京生まれ。日本女子専門学校（現昭和女子大学）在学中に歌誌「まひる野」に入会し、窪田章一郎に師事する。能楽喜多流宗家にも入門。卒業後、昭和52年まで教職に従事。処女歌集『早笛』を刊行。第五歌集『桜花伝承』で現代短歌女流賞を受賞。「まひる野」より独立し、歌誌「かりん」を創刊。現在、朝日歌壇選者、教育テレビ「NHK歌壇」選者。平成7年以降、新作能「晶子みだれ髪」「額田王」を発表するなど能楽の世界でも活躍中。歌集に、『葡萄唐草』（逍空賞）『月華の節』（詩歌文学館賞）『阿古父』（読売文学賞）『飛種』（毎日芸術賞・斎藤茂吉短歌文学賞）、著書に『鬼の研究』『歌枕をたずねて』など多数。現在、『馬場あき子全集』刊行中。

黒田杏子（くろだ・ももこ）

俳人。昭和13年、東京生まれ。東京女子大学在学中、俳句研究会「白塔会」で山口青邨の指導を受ける。心理学科卒業後、博報堂入社。「広告」編集室長を経て、現在、博報堂調査役。「夏草」同人を経て「藍生」を創刊主宰。第一句集『木の椅子』で現代俳句女流賞・俳人協会新人賞、第三句集『一木一草』で俳人協会賞を受賞。教育テレビ「NHK俳壇」主宰、「俳句研究」賞選考委員。「小説現代」「日本経済新聞」などの選者も務める。句集に『木の椅子』『水の扉』『一木一草』、著書に『黒田杏子歳時記』『俳句と出会う』『廣重江戸名所吟行』『おくのほそ道をゆく』など多数。藍生俳句会：〒151 東京都渋谷区上原2-11-18
TEL03(3465)4819 FAX03(3465)4820

短歌 俳句 同時入門

1997年11月13日 発行

監修者 馬場あき子／黒田^{ももこ}杏子

発行者 浅野純次

発行所 〒103 東京都中央区日本橋本石町1-2-1 東洋経済新報社

電話 編集03(3246)5661・販売03(3246)5467 振替00130-5-6518

印刷・製本 東洋経済印刷

本書の全部または一部の複写・複製・転載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。これらの許諾については小社までご照会ください。

©1997〈検印省略〉落丁・乱丁本はお替えいたします。

Printed in Japan ISBN 4-492-04102-8

◎この本の読み方

まえがきにかえて

本書は、興味分野別、段階別などにより、PART1の「短歌と俳句の違い」から、PART2の「作り方・学び方」、そしてPART3の「作品・解説」までに分かれています。あなたが「短歌」と「俳句」のどちらに興味をお持ちになっているか、どのように取り組もうと思われているかなどによって、以下のように読み進められてみては如何でしょうか。

●これから短歌と俳句を始めようとしている方へ――

まずPART1「短歌と俳句はこう違う」をお読みになって、その相違点を知った上で、PART2、PART3へと読み進めていかれてはと思います。

●短歌、俳句のどちらかをやりながら、比較の妙も楽しみたい方へ――

PART1をお読みになって、その上で、PART2、PART3の短歌か俳句のどちらかを選んで、読み進められてはと思います。

●短歌、俳句は門外漢だが、鑑賞できるようになりたい方へ――

PART 1、PART 2はざっとお読みになって、PART 3の作品と解説を中心にお読みになってはと思います。

さて、いま「短歌、俳句ブーム」といわれています。本書はその「短歌と俳句」の楽しみを一冊に収めるという全く新しいスタイルの「同時入門書」です。この二つは「近くて遠い仲」などといわれてきましたが、その二つをもっと身近かにたのしく「交流」していこうという提案でもあるのです。

では、さっそく「短歌と俳句の楽しみ」の世界へどうぞ――。

短歌俳句

同時入門

●目次●

Part
1

対論編

●この本の読み方

1

「短歌」と「俳句」はこう違う

7

歌人／馬場あき子

俳人／黒田 杏子

Part
2

作り方・学び方編

短歌の作り方・学び方

40

――講師／米川千嘉子

俳句の作り方・学び方

56

――講師／中岡毅雄

Part
3

●状況別
作品・解説編

第一章 「日常生活」

「日常生活」と短歌

——講師／小島ゆかり

「日常生活」と俳句

——講師／岩田由美

76

92

第二章 「旅」

「旅」と短歌

——講師／荻原裕幸

「旅」と俳句

——講師／奥坂まや

110

125

第三章 「恋愛」

「恋愛」と短歌

——講師／水原紫苑

「恋愛」と俳句

——講師／正木ゆづ子

142

157

第四章 「死生観」

「死生観」と短歌

176

——講師／辰巳泰子

「死生観」と俳句

188

——講師／日原 傳

第五章 「自然」

「自然」と短歌

202

——講師／穂村 弘

「自然」と俳句

212

——講師／小澤 實

第六章 「言葉の技術」

「言葉の技術」と短歌

226

——講師／加藤治郎

「言葉の技術」と俳句

242

——講師／仁平 勝

●執筆者プロフィール

255

PART 1

対論編

「短歌」と「俳句」はこう違う

歌人／馬場あき子

俳人／黒田 杏子

司会／水原 紫苑

短歌と俳句は近くて遠い仲

水原 本書は、短歌と俳句の楽しみ方を一緒に本にして読んでいただく、という企画がもとで完成しました。短歌と俳句は近くて遠い仲と言われたきた間柄で、ずうっと仲よくしようとしながら、質が全然違うというふうなところがあって、交流がなかなかなかったからです。昭和三十年代ごろから、短歌と俳句は自分たちの様式を使って表現できる面白味というようなものが、もう少し交わらなきゃいけない、という気持ちがありまして、三十年代以降随分交流が生まれて、お互いに摂取し合ったところもあると思うんです。それでもやっぱり一般的には短歌と俳句はまったく違ったジャンルで、やればやるほど距離が広がる、そういう認識になっていると思うんです。この点、俳句の黒田先生はどうお思いですか。

黒田 私はね、小さいときから、なるべく言葉を多く使わないで自分を表現できる、つまり泣きことも言わない、言いわけもしない潔い形式でズバリと自分が表現できれば一番いいな、と考えていた人間なんです。結果として世界で一番短い俳句にいつてしまったというわけです。現在も、私はなるべく「言わないで言う」ことを心がけています。

水原 短歌の馬場先生は如何ですか。

馬場 最近、富山県で「平成今どき万葉集」というのを募集し、編集したことがあるんですが、

それがとても変わっていたのは、様式的には短歌も俳句も漢詩も何でもいい、短いフレーズであれば様式を問わない、文章でも構わない、ということです。そうしたらたいへん喜ばれて、一万近い作品が集まった。読んでみて、俳句と短歌の裾野というものがこういう認識になっているのかな、と感じて面白かったですよ。下手をすると、俳句は全部「模様」になっちゃう。模様というのは景色というか、絵はがきみたいな取り合わせというイメージですね。AとBとの取り合わせ、二つのものが合えば俳句になる、という基本的な姿勢があるんですね。

一方、短歌は「愚痴」か「口説き」になっちゃう。愚痴にしろ、口説きにしろ、何か自分の心の中にあるものを言いたい、そういうせば詰まった感情のどもとまで詰まっている人は、短歌でもってぐじぐじと言って、あらゆることを全部言っちゃわないと次に進めない。そういうのが短歌を好む性質の人かなと思います。そういうものを切り捨てて、言いたいことは後ろ手で、ドアの一つ向こうにしまっておいて、ああ、もみじがきれいだなとか、青葉に風が涼しいねとか、そういう言葉で言う人が俳句をやるんだろうと思うんです。短歌はその情念の尻尾を大切にする方ですね。

俳句の季語、短歌の「たおやめぶし」

水原 黒田先生は情をぶつけないといふときはどうなさるんですか。

黒田 それはやはり、私のやり方で情をぶつけるんです。でもね、情そのものを言葉の表面に出したくない。出さないの。出さないけれど、自分の表現として不満感が残らないものにします。「言わぬが花」という言葉があるけれど、俳句の場合、言わぬが花の核心になるのが季語だと思う。自分のつくった句のその季語に本当に自分の魂が入れば、作者としては思い残すことがないんです。逆に、魂が入らない季語を安直に歳時記からただ借りてきて形式的に使ったような場合、深い不満感が残りますね。

馬場 その季語が発止^{はつし}としてなきやだめなのね。

黒田 そうそう。それにはやっぱり自分で季語に入魂できないといけない。俳句ってね、季語だけでなく、一句の言葉すべてにでしようにけれど、短いだけに、魂が入るか入らないかというのは非常に大切な問題です。つまりそこに修練が要るんでしょうね。

馬場 なるほどね。私が面白いなと思っているのは、短歌というのは「たおやめぶり」が中心だということです。その「たおやめぶり」はどこから来たのか。万葉集なんかを見ると、短歌というのは天皇や皇后、皇族、彼らを取り巻く貴族たちもつくったけれども、むしろ彼らの周辺でその人の気持ちや代弁する人たち、宮廷歌人、人麿にしろ、赤人にしろ、額田^{ぬかた}にしろ——額田なんかは側近にあつて巫女^{みこ}的な要素も持っていた——、そういう人が代わってつくる歌が天皇の歌や皇后の歌になっている。そういう人たちがつくるときは、上の人の立場ですから、ものすごく

相手の気持ちをいたわりながら、つくっているわけね。だから、非常に細やかな感情でもって、小さい言葉にすごい神経を使っている。そこに短歌の面白さもよさもあるんだけれども、下の句にいたって、さっきの発止としたところをたたき込むところがある。それが「たおやめぶり」であると同時に、「ますらおぶり」にもなれる要素ですよ。人の内面に対するこまやかな配慮が感情の深さや深層の心理を浮かび上がらせた「たおやめぶり」、また、視点の大きい把握と断言の雄々しさが詠嘆の深さを見せた「ますらおぶり」の両方ができてきて、二つは相方が混じりあいつつ名歌がつくられながら来たんだと思うんです。

「三十一文字」と「十七音字」

水原 両先生がおっしゃっていることを俳句と短歌の本質だとしますと、これから何か自分を表現したいという人は、自分の進むべき道をどうやって見分けたらいいでしょうか。

黒田 短歌は三十一文字、俳句は一行、十七音字。両方ともに短い詩型、短詩でしょう。どちらも経験がないという人の場合は、三十一文字か十七音字のどちらかで自分のところを詠んでみる。そこで相性を見きわめるほかにんじゃないでしょうか。

馬場 そうね。昔の歌謡を引用して悪いですけど、古代の歌謡で、「くさかえの入江のはちす花はちす身の盛り人羨ともしろきしろかも」というのがあります。とても好きな歌なんですけれど、「く

さかえの入江のはちす花はちす」というところは、俳句にできると思うんです。そのところで止めてもいい。ところが、その後でどうしても「身の盛り人羨しきろかも」——若い人はうらやましいな——、と言わないではいられない運命……。そういう運命というものを自分で感じている、そういう人は、やっぱり短歌に赴くしかない。

言わなくてはならない運命とか、そういうものを感じている。だからといって、それを全て言葉にするわけではなく、おっしゃったように半分言っただけでも、詠嘆として十分心情的だと思うの。短歌の韻律も「間」が大事だけれど、五七五という俳句の韻律も「間」の韻律ですね。こういう「間」の利いた韻律を唱えれば、心情は伝わるのよ。ただ、短歌はもう一步示唆的に踏み込みたいんですね。

黒田 俳句ではその大事なところを「あえて言わない」という一種の快感があるんですね。私が短歌にあこがれるのは、いい短歌は七七が聞かせどころだからなんです。読者としては終わりの七七で酔いたいわけね。だけど、七七で酔わせない歌も多い。そこでぐずぐずと述べ過ぎて、しまいには嫌になっちゃうものもあるけれど、いい歌は七七で酔いますよね。俳句は言わないところ、「余白」で酔わせている。

馬場 俳句も下の一句は大事でしょう。俳句には季語が入るから、初句が季語の場合もあるけ

れど、初一句と三句、結句とどっちを大事にするか、妙な言い方だけど、どうですか。

黒田 場合によりますが、まあ、最後でしょうね。俳句においてはね。

馬場 下五ですよ。

黒田 短歌では七七に魂が入るんですよ。

馬場 そうですね。つまり、「言わないよ」という魂が入るか「思い切って言いました」という魂が入るか。短歌の方でも言っていないながら言わない七七があるんですよ。

黒田 そういうことです。異なっているところですね。

最初は両方やってもいい

馬場 短歌の長い歴史の中には、心の中を言わないで伝えようとした歌と、言って伝えようとした歌がありました。これも俳句と同じことなんです。例えば、赤人は言わない、人麿は言ったというようなことです。俳句で言わない面白さを表へ立てたのと同様、短歌にも言わない面白さがあったわけです。だから、そのところが面白いなと思うんですよ。写真と非写真という分け方よりも、言うか言わないかという分け方のほうがわかりやすいんじゃないかな、と思うことはあります。

黒田 歌会始めにみられるように、短歌には歴史的な流れがあります。俳句にはそういう行事

は全くないんです。そんなことは置いておいて、いま、どちらを選ぶか、どちらが自分に向いているか、そのことを考える場合、俳句と短歌に共通している「言葉で表現したい」という欲求を持った人が、十七音字の中で短く言うか、三十一文字で言うかということしか選択肢はないと思うんですね。ですからね、現代というのは、短歌と俳句の違いと共通点が同時に論じられるべき時期なのではないかな、という感じもします。

水原 そうなると両方してもいい、ということにもなりますか。

黒田 なります。

馬場 それは十分可能ですよね。楸邨もそうだったし、短歌をつくっていて最終的には俳句に決めたという人はたくさんいるんじゃないかしら。俳句から短歌へというケースはあまりないかな。

黒田 私の予測として、馬場さんは七十歳以降、ときどきは俳句をつくられるんじゃないかと楽しみにしているんですよ。例えば、新年にね、年頭五句とか、そういう形で発表されるとか……。

馬場 私の短歌のつくり方の一つとして、まず切れ字のない俳句を考えて、それから七七をつけるという場合はしょっちゅうありますよ。だから、まず五七五が出てきちゃって、それはノートのあちこちに埋もれているんです。それから、締切が迫ってくると、去年何かつくっておいた